

シリーズ
「景観文化考」第10回

S E R I E S

景観・デザイン・まちづくり

L A N D S C A P E



中井 和子 (なかい かずこ)

中井景観デザイン研究室代表

東京出身。筑波大学大学院環境デザイン専攻修了。(株)G.K.インダストリアルデザイン研究所(東京)勤務を経て、1975年～78年フランス政府給費留学生として、マルセイユ及びパリの国立美術大学で建築・環境デザインを学ぶ。1985年建築・環境デザインの研究所を設立し現在に至る。北海道教育大学・札幌市立大学・北海道工業大学の非常勤講師、『まちの色彩作法』(共著)、『農業・農村と地域の生態』(共著)、『北のランドスケープ』(共著)など。

北海道の景観は空から飛行機で眺望するとき、その雄大で豊かな自然と農地・農村景観の広がりを感じてくることができる。開拓期の殖民区画により分割された農地、直交する道路や用水路、耕地防風林と散居型の農家の存在など、連続する山岳地帯を避けながら開拓を進める農業者の熱い思いが伝わってくる。日本の他の地域では決して眺望することのない、開拓の歴史文化と北国の風土が形成する、水田・畑作・酪農の美しい農地・農村景観である。また一方で、北海道固有の歴史的背景と自然環境の下に、道南の江差や松前など江戸時代から続く町も存在し、さらに、明治の欧米の技術・文化の導入と日本古来の伝統文化との融合により形成された多様な街並景観が展開する。このように北海道の景観は、地域らしい多面的価値を有する魅力ある地域資源であると考えられる。

日本の最北端の積雪・寒冷の立地条件は、必然的に北方型の街づくりや家づくりを育み、衣食住に関する生活文化のデザインを展開してきた。また、北海道には古くからアイヌ民族の歴史・文化が存在し、民族固有の生活様式が注目されている。北海道の景観を、広域的にパースペクティブ※にとらえると、日本の他都府県とは異なる地域の生活・生産の文化が反映された景観の存在を認識できる。しかしながら、人々がその価値と存在に気づかなければ、放置され自然消滅することになる。

私たちはふるさとに帰省したとき、その風景のなかに自分の記憶と重なる象徴的特性を確認して安どし、ふるさとへの郷愁を感じる。一人ひとりがふるさとの風景のなかに、無意識のうちにも地域が共有する文化的アイデンティティを読み取っている。文化的アイデンティティとは、個々人の心の記憶に蓄積された「地域らしさ」を規定する景観構成要素(風景の記号化)であり、地域資源として住民に共有化されるものであろう。したがって、地域らしい美しい景観を持続させるには、地域で暮らす人々が、地域の景観を感じる目(気づき)

※ パースペクティブ(perspective)：遠近法。透視画法。



と見る心（まなざし）を育むことが重要である。北海道の総合的景観形成を考えることは、時間軸と空間軸の広がりにおいて、自然と人間と社会の営みが無理なく共生できる、まちづくり文化を育み地域コミュニティを再生する仕組みと人材育成を考えることである。それはまた、地域住民にとっては、ふるさとの景観が継続することを意味し、地域で暮らす誇りと愛着心を育てることにつながる。

1970年代、全国紙の日曜版に写真家の前田真三氏が「美瑛の丘」の風景写真を連載していた。私はまだ東京に居住していたころで、見慣れた日本の農村景観とは異なる美しい風景写真に、強く引きつけられた。美瑛丘陵の農地景観の美しさに気づき、日本中にその存在を知らしめた前田氏の功績は大きい。その後、北海道で暮らすことになり、美瑛の丘にも幾度か出かけ実際の景観を眺望することができた。しかしながら、フレームで切り取られた写真の美しい景観と違い、眼前に広がる農地・農村景観は、遠景・中景・近景の三次元の空間で時間的経過のなかでとらえることができる。また、家畜の鳴き声や草木の匂い、頬に触れる風の流れや温度など、五感で体感することも可能である。そして、そのような農地景観の形成は、生産に従事する農業者の努力の賜であることも理解した。しかし、現実の美瑛の眺望景観には少々落胆させられる場面もあったことから、広域的にパースペクティブに地域特性を把握し、総合的景観の魅力を持続できる仕組みを地域で考えることが重要であると実感する。先日の北海道新聞に、前田氏の写真ギャラリー「拓真館」の来館者減が報じられていた。前田氏の美しい風景写真と現実の農村景観とのギャップが、段々と広がってきているのではなかろうか。訪れる観光客の増加で商業施設が乱立し、通俗的な景観の観光地となり、質の低下を招くような事態は避けねばならない。それは観光客にとっても地元住民にとっても、マイナスな結果しかもたらさないと考える。

昨年末、岩見沢の複合駅舎が「グッドデザイン大賞」を受賞した。一般公募の全国コンペで376件の応募作品から選ばれた建築デザインで、鉄道の町の歴史を物語る古レールと名前を刻印したレンガを使用した趣ある建築である。しかし今回は、新築前の仮駅舎を壊す段階からさまざまなイベントが開催され、地元の市民や青年会議所、北海道教育大学の学生等と一緒に参画する場となった。駅舎および駅前広場は都市の核心となる象徴的な公共空間である。したがって、突然、大規模建造物が出現するのではなく、地域住民の期待と不安の感情を受け止めながら、新しい駅舎が既存の都市空間に溶け込んでいくプロセスが重要となる。新たな駅前広場は、多くの市民が好感を抱く魅力ある都市景観へと生まれ変わった。それと同時に、地域に住む老人も若者も、これからのまちづくりへの夢と抱負を語り始めた。新駅舎の誕生とともに、地域のコミュニティ再生と人づくり・組織づくりも動き始めている。

平成16年に公布された「景観法」は、現況の景観の悪い部分を治す対症療法の効果は期待できるが、運用が適切でなければ、後々まで悔いを残す景観に帰結する副作用も起こり得る。しかし本来は、多くの市民の景観意識が高まり、まちの内部からわき起こる活力によって、地域らしい魅力ある景観・まちづくりが実践されることが望まれる。景観形成こそゆっくりと時間をかけて、地域のまちづくり文化を育み人材育成を図りながら進めて行く、利便性や効率性とは無縁のスローライフな取り組みであろうと考える。

都市には都市の、農村には農村の景観形成へのかかわり方がある。総合的でパースペクティブな観点から考察しつつも、地域で考え行動する「地域力」が必要とされる時代である。

シリーズ「景観文化考」を1年間ご愛読いただき、心から感謝申し上げます。

